

日本語・日本文化社会への気づきを促す「研修活動の記録」

—自律学習の意識化を目指して—

The “Weekly Journal” as a Device to Promote Learners’ Awareness of Japanese-Language and Culture: Aiming to Create Autonomous Learners

石井容子・熊野七絵（国際交流基金関西国際センター）

ISHII Yoko, KUMANO Nanae（The Japan Foundation, Japanese-Language Institute, Kansai）

要 旨

海外で日本語を学ぶ大学生のための短期訪日研修では、日本での体験や交流を重視したコースをデザインしている。このようなコースでは、自主的な活動を行うため、自律学習の意識化が必要となる。そこで、学習者が内省活動に慣れることを狙い、定期的に「研修活動の記録」を書かせる試みを行った。この学習者の記録を元に、学習者の日本語や日本文化社会への気づきがどう変化し、自己評価にどのような影響を与えるのかを検証した。

For overseas university students visiting Japan on short-term Japanese-language programs, we designed courses focusing on socio-cultural experiences and exchange activities. Aiming to lead passive learners to become autonomous learners, we incorporated a “weekly journal” into the program. Taking this journal and learners’ self-evaluation as data, we examined the changing process of learners’ awareness of Japanese-language learning and Japanese socio-cultural aspects.

【キーワード】 短期訪日研修、「研修活動の記録」、日本語・日本文化社会への気づき、自己評価、自律学習

1. 実践を行った研修の概要

関西国際センターでは海外で日本語を学ぶ大学生のための短期訪日研修を実施している。来日機会が限られた国々から学生を招聘し、日本語を学ぶと同時に日本の文化、社会への理解を深める機会を提供し、その後の日本語学習の継続を奨励することを目的としている。期間は6週間で、関西国際センターの宿泊棟に滞在しながら、日本語を学び、日本を体験するコースである。今回の試みの対象とした2007年春季研修の場合、参加者は、タイ、インド、スリランカ、フィリピン、メキシコ、ロシア、アゼルバイジャン、トルコ、ケニアなどさまざまな地域、国からの21名の大学生で、レベルは初級終了から日本語能力試験2級合格程度であった。

この研修では、短期であること、各研修参加者の日本語学習、日本理解へのニーズや自国での学習環境、レベルが多様であること、また帰国後の学習継続を奨励するためのコースであることから、新しい漢字や文法事項を積み上げ式に学ぶのではなく、日本滞在の機会を最大限に生かすため、①これまでに学習してきた日本語を使う、②日本を体験し、理解を深める、③今後の日本語学習に役立つ発見をする、の3点を目標としている。

この目標に基づいてデザインされた研修の全体像は図1の通りである。

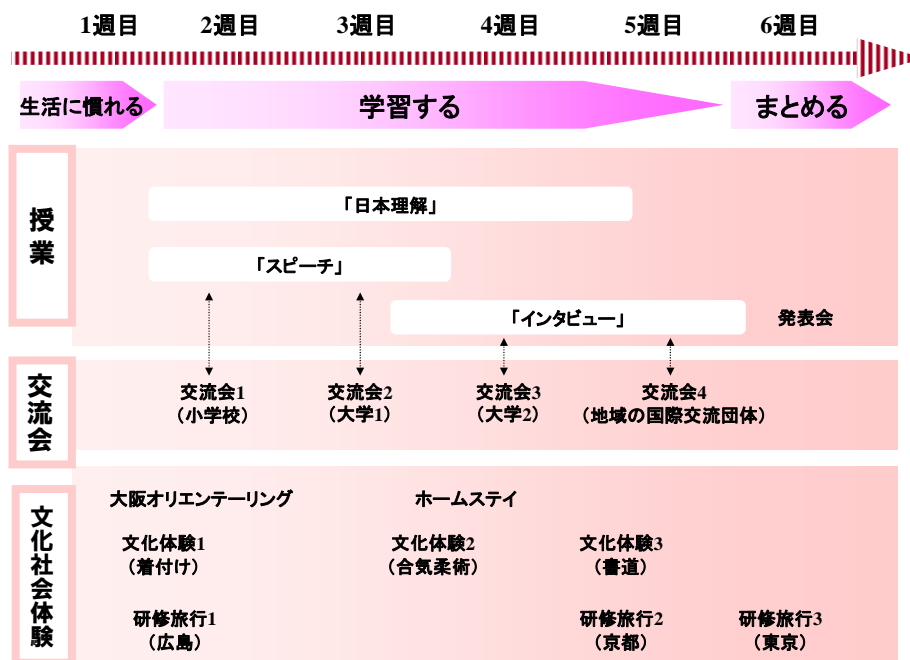


図1 大学生訪日研修の全体像

まず、授業としては主に3つの科目がある。日本の教育、伝統行事、家族などトピックごとに学びディスカッションする「日本理解」、自国紹介などの発信をする「スピーチ」、日本人に実際にインタビューをしてグループでまとめて発表する「インタビュー」である。交流会としては小学校訪問、大学生や地域の国際交流団体との交流会があり、この交流会はスピーチの発表、インタビュー活動の機会ともなっている。また、文化社会体験として、大阪、広島、京都、東京などへの研修旅行、ホームステイなどの社会体験、着付けや書道など伝統文化体験の機会がある。このように日本人との交流会や日本での文化社会体験と日本語の授業を関連付けるようカリキュラムが組まれている⁽¹⁾。

このような、体験や交流を重視したコースにおける評価の方法としては、テスト等による数値で成績をつけるより、各自が自分なりに学んだ成果や変化を重視したいと考え、以下①～⑤をまとめたポートフォリオ評価をおこなっている。

- ①「研修の目標と内容の説明」研修の目標と、研修内容（日本語授業、日本人との交流、社会体験、文化体験、発表会）を一覧にしたもの（日本語版と英語版）。
- ②「自己目標・自己評価シート」研修開始時に、a) 日本語学習について、b) 日本での体験について研修参加者自身がそれぞれ自己目標を立て、研修終了時にそれに対する自己評価を行うとともに、c) 帰国後の継続学習の目標を記述したもの。
- ③「研修活動の記録」1週間ごとに自己の日本語学習や日本理解を振り返り記述する「研修活動の記録」計6回分をまとめたもの。
- ④「発表会の成果」スピーチ発表会原稿、インタビュー発表会原稿と視覚資料（パワーポイント資料か配布レジュメ）。
- ⑤「教師からのアドバイス」担当教師からの研修参加態度や日本語能力面、日本理解面

についての所見、今後の学習に向けてのアドバイスを記述したもの。

体験や交流が中心となるコースでは、学習者が自主的な活動を行うため、また帰国後の継続学習へ繋げるためにも自律学習の意識化が必要となる。自主的な活動や自己評価を行うためには、学習者自身による内省、気づきは欠かせないが、学習者には教師主導に慣れ、またそれを望む比較的受身な者が多い。そこで、研修では内省活動に慣れることを狙って「研修活動の記録」を書かせるという試みを行っている。本稿では、学習者が記述した「研修活動の記録」を元に、学習者が日本語や日本社会・文化に対してどのような気づきを持ち、それがどのように変化していくのか、そして自己評価にどう影響を与えるのかを検証する。

2. 「研修活動の記録」と研修での自律学習支援

「研修活動の記録」は、ある特定の授業を対象とするものではなく、研修での授業を含む活動全般及び日本での生活の中での日本語や日本社会・文化への気づきを週に一度書くものである。

右の「研修活動の記録例」のように、1週間を振り返り、①日本語について気がついたこと、②やってみて気がついたこと、③生活の中で気がついたことの3点について、1文でまとめて記述し、それぞれについてさらに具体的に詳しく記述するような書式になっている。

このような書式にしたのには、理由がある。これまでの実践の中で単に1週間の報告を書かせるだけでは、日記のように時系列で出来事だけを並べてしまう学習者が多く、また、気づきを自由に挙げさせると、生活面での気づきに偏るなど日本語学習や日本への理解の深まりになかなかつながらないという問題が生じたからである。そこで、自律学習につながるよう、学習者の内省を促す書きやすい形にするために、試行錯誤と工夫を重ねてきた。

研修活動の記録を含む、研修での自律学習支援・評価の全体像は次の図2の通りである。

まず、研修開始時には担当教師との一対一の面談（学習相談①）、クラスメートとの話し合い（振り返り①）を通して自己目標を立て、記入する。

研修中は週に一度、活動や体験を振り返って研修活動の記録を書く。月曜日の朝、週フィードバックの授業でクラスメートと前の週について話し合った後、提出する。教師は提

「研修活動の記録」例

ID番号 _____ 名前 _____

4. 研修活動の記録

② 2007年 5月 21日(月) ~ 5月 27日(日)

★ 活動記録は毎週月曜日の朝の先生に渡してください。

（参考）期間内の主な活動：家族オリエン、文化座談（添削）、公高研修旅行、日本語検定大会など

● この1週間で気がついたことを一文で書きましょう。

1. 日本語について気がついたこと

今、日本に住んでいて、漢字をよく覚えていきます。

2. やってみて気がついたこと

若者と話すのは分かりやすい。年よりと話すのは分かりにくい。どうしようかな。

3. 生活の中で気がついたこと

大阪の人はすごく親切な人です。迷った時人は手伝ってくれます。

★ 1~3について、考えたことなどを詳しく書きましょう。

* このごろ、テレビを見たり、買物をしたり、まちを回ったりしました。その活動しながら、習った漢字を練習して、新しい漢字を手に入れました。日本の生活には基本的に漢字を分かり付けはなりません。例文は「漢字が」一本です。新聞をよめるように毎日(1)し、(2)か(3)は「習った」です。

* 日本の若者は、より話します。話す時、若者のことは、大阪へ来れば、全部分かりました。でも年よりと話す時は、特に男の子、多い言葉を分かりません。でも度々年よりを聞くと、だんだん分かるようになります。これもいいですね。

出された記録にコメントを付して口頭での確認と共に返却し、記述の内容によっては適当なアドバイスを行う。また、振り返り②でクラスメートと共に、自己目標の修正や、これまでの学習方法の振り返りや共有を行う。

研修終了時には自身が書いた6週間分の「研修活動の記録」を参照しつつ、クラスメートと共に研修を振り返って（振り返り③）自己評価を行い、帰国後の新たな目標を設定する。その後、教師は各自の自己目標、自己評価と照らし合わせながら、研修中の各科目や活動全般へのコメント評価を行い、学習相談②でポートフォリオとともにコメント評価を渡し、今後の学習のためのアドバイスをする。

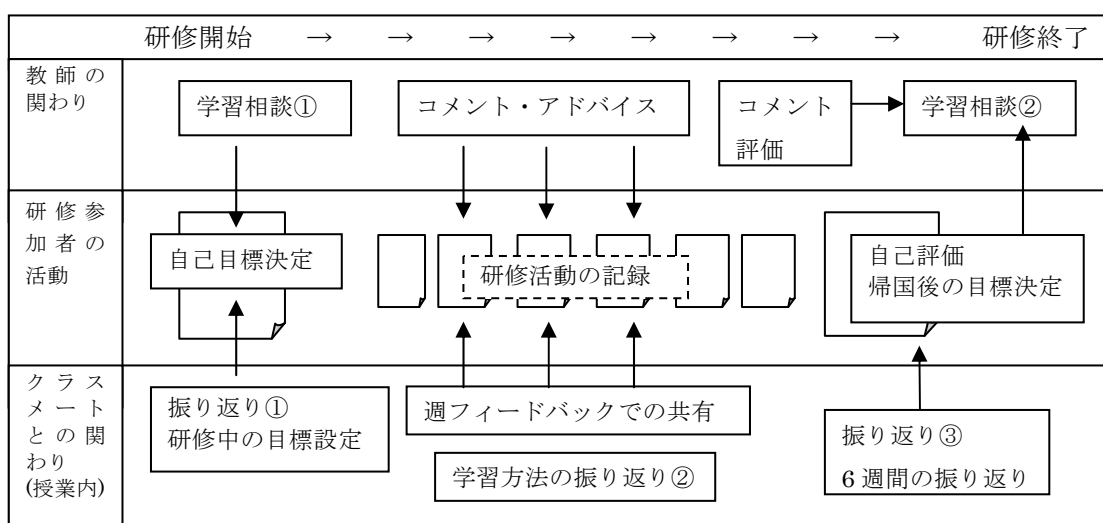


図2 自律学習支援・評価の全体像

3. 「研修活動の記録」の実際の記述

では、「研修活動の記録」の実際の記述はどのようなものだったのか。以下に学習者による活動記録の記述例（一部抜粋）を示す。例1の学習者Aは、国籍は中南米、日本語レベルは初級修了程度で、ロボット工学を専門としている。この学習者については、日本語に関する気づきについて検証する。

日本語についての気づきには、まず、生きた日本語、つまり教科書ではなく実際の日本語についての気づきがある。例えば、「大阪弁を知った（①：週数を示す。以下同様）」「日本の生活には漢字がわかることが必要（②）」といったものである。次いで、自身の日本語運用能力についての気づきである。「話すときに母語で考えている（①）」「言葉の使い方がわかって、話すときに簡単に文が作れた（③）」「だんだん考えをよく述べられるようになった（④）」「ホームステイで複雑な話題で長い時間話すことができた（③）」等の記述が見られる。また、「最初から日本語で考えるほうが良い（①）」「生活をしながら習った漢字を勉強する（①）」「習った言葉を忘れないようにすぐ書く、すぐ使う（③）」「本をたくさん読めば語彙が増える（⑤）」等、学習ストラテジーへの気づきも見られる。更に、「毎日、専門語彙を勉強しないと、大学院に入るのは難しい（⑤）」「専門に関する記事は英語で書いていないので、自分の専門には日本語を勉強することが大切だ（⑥）」のような帰国後の目標に繋がる記述も見られる。

このように、学習者Aが、研修開始当初の大阪弁や、母語での思考といった気づきから、内省を繰り返しながら、帰国後の目標へつながる記述へと内省を深めていることが窺える。

記述例1：学習者A 日本語に関する気づきの記述。①～⑥は週数を示す。(2)

- ① 私は大阪弁を知りませんでした。大阪弁は日本文化のぶぶんです。それから大阪で勉強していて大阪弁を知ることはいいと思います。(略) 私は話すことをあまり練習しません。それから日本人と話してみても時に適当な言葉を見られません。それに話す時に[言語名]語で考えます。あとで日本語にほんやくします。それはよくないと思います。最初から日本語で考えてほうが良いと思います。
- ② このごろ、テレビを見たり、買い物をしたり、あちこちに回ったりしました。この活動をしながら、習った漢字を練習して、新しい漢字も手に入れました。日本の生活には基本的な漢字を分かなければなりません。例えば新聞は漢字が一杯です。新聞を読めるように毎日いっしょけんめいがんばりたいです。
- ③ [国名]でたくさん言葉をならいました。意味をわかりました。でも話す時に使い方をよくわかりませんでした。今週日本人とたくさんしゃべる機会がありました。だから習った言葉の使い方をわかって話す時にこの言葉で文章を簡単に作りました。新しく習った言葉をわすれないように私には言葉をすぐ書いてほうが良いと思います。それにできれば話す時に新しく習った言葉も使ってほうが良いと思います。
- 金曜日まで日本人とよく話していましたが短い間だけ話しました。それに簡単な話題について話しました。例、道を聞いたり、食物を注文したりしました。でもホームステイで複雑な話題について長い間に話しました。三時間もしゃべて、全部の私の意見を表現することができました。宗教について、日本と[国名]の文化について、[国名]の伝統的な料理について話すことができました。
- ④ 日本に来たばかり時、日本語を三年間に勉強しましたが、日本語で話すことは難しかったです。友だちとしゃべる時、私の意見をよく述べませんでした。単純な話題だけしゃべることができました。でも今毎日日本語を使っていて、だんだん私の考えをよく述べていると思います。
- ⑤ (注：日本の大学院に入るために)それからインターネットで色々な大学について調べて、適当な先生を見つけるために様々な研究プロジェクトの情報を読みました。でも先生の研究の情報を読んでみた時、たくさん複雑な言葉があって困っていました。はじめにほとんどの言葉の意味をわかりませんでしたから、時間がかかりました。でも複雑な語彙の意味をわかって読むことは簡単になりました。毎日私の専門の語彙を勉強しなければ、大学院に入ることは難しいだと思います。
- (注：古本屋で日本語の本を買って)本によって語彙を豊富にすることが早くできると思います。どうしてかといと、ストーリーが興味を引いたら全部の言葉の意味を分かりたいからです。[国名]に帰るあとで、全部の本を読むようにしたいです。
- ⑥ さいきん、専門にかんするきじを読んでいます。最初に難しかったです。だんだん内容をだいたい分かるようになりました。後でたくさん本当の面白いきじをインターネットで見かりました。このきじは英語で書いていません。これから私の専門には日本語を分かることは大切だと気がつきました。私の専門の学生の中で私の以外にだれも日本語を勉強していません。これから日本語が上手になったら、仕事を見つけやすくなります。

次に、記述例2を示す。学習者Bは、国籍は南アジア、日本語を専門とし、日本語レベルは2級合格程度である。この学習者については、日本文化・社会についての気づきを検証する。

まず、体験や交流を中心とする研修中の様々な活動の中での気づきが記述されている。例えば、体験からの気づきとしては、旅館に宿泊した体験から「忙しくなった現代人は洋式の生活に慣れている(②)」、神社で無人のおみくじを見て、「日本人は正直だ(③)」、書道を体験して「ただ書くのではなく、ゆっくりした動作で心を安定させて書くことだとわかった(⑤)」といったものがある。また、交流からの気づきとして、大学生との交流会で、大学生にインタビューを行った後、「大学生のアルバイトは悪いと思っていたが、考えが変わった」、あるいは、小学校を訪問した後には、給食や掃除を子供たち自身で行うことについて「子供のときから責任を持たされているのはいい(④)」と記述している。また、日本で生活する中での気づきとしては、人が電車の中で寝ているか音楽を聴いているかであることを指摘し、「個人の生活に慣れている感じがする(①)」、日本語が速く、最後まで言わ

ないことについて「速く話すのは現代スタイルだと感じた(①)」日本での自動販売機の多さなどから「生活の中に機械が多いから人間関係が弱くなっていったのではないか(②)」といったものが見られた。

これらの記述を時系列に全体で見ると、学習者Bが現代生活の早さや個人重視など、また伝統的な文化のゆっくりした動きへの気づきを繰り返しながら、独自の視点で考察を深め、新たな日本文化・社会観を作っていた様子が窺える。

短期の訪日研修において、学習者が日本文化・社会について発見し、驚くことが多くあるだろうことは想像できるが、日々の発見や驚きというのは、その時点で振り返らなければ、すぐに慣れ、忘れてしまうものである。それを定期的に記述させることで、受身ではなく、積極的に文化・社会について見つめる姿勢を作り、また、単に発見に留まらずその事象の背景や、事象間の関連を考察することへとつながるのではないだろうか。

記述例2：学習者B 日本文化、社会への気づきの記述

- ① (略)外に電車の中でのいるほとんどの人は寝ていることも見ましたが、それはどうしてだかわかりませんでした。ほとんどの若者はワクマンを聞くことにしています。彼らは自分の世界にとじこもっています。社会的なきょうみはもたないような気がしました。そのようないろいろなことをいっしょにしてみると、日本人は個人的な生活になれているように感じました。
日本語はもっと忙しくなった日本人の生活様式に合うように短く早く話せるようになっていきます。日本人の発音はとても早かったです。また、文は最後までに反さないでとちゅうまで言うのも気がつきました。ほとんどの子どもはとても早く日本語で話しているので、早く話すことは現代スタイルだと感じました。
- ② 日本へ来るまえに日本の伝統的な家について習んでいましたが、今の家や生活様式はちがっているをわかりました。(旅館の体験の記述の後)現代の人々は洋式の生活になれているそうです。でんとうてきな生活はじみなものですが、動作は早くないです。それで忙しくなった日本人が洋式の生活様式が選んだのかもしれない。
子どもは小さいの時、両親と親しんで住んでいますけど、若者になって自分でひとりくらしをしている人が多いと感じました。(略)また、おとしよりは自分の生活で一人で住んでいます。じどうはんばいきなどの便利な機械は人がほかの人と話すチャンスが少なくしていると思います。なんでも一人でできるようなのはとても便利がいい方法だと思いますが、それは人々の関係が弱くした理由だと感じました。
- ③ (注：神社のおみくじについて)自分にほしいならそばにあるはこに100円か200円入れて一つとってもいいです。でもだれもそばにいません。しかし、だれもだまさないでお金を入れて一つを取るのをみてびっくりしました。それらは[国名]にあつたら、お金をぜんぜんはらわないかもしれない、日本人はしょうじきな人だとわかりました。
- ④ (注：大学生へのインタビューの記述の後)私はこのまえ、じゅぎょうをきにしないでアルバイトにむちゅうになっているのはわるいと思っていたが、りょうしんのお金を使わないで自分の生活を自由にすごすためというかんがえかたとくらべてみるとそれはわるくないとおもいます。
(注：小学校を訪問して)[国名]のばあいには、きょうしつ、こくばんだけそうじするのはふつうですが、この小学校で見たようなかいだん、ゆかをそうじするのはぜんぜんありません。それをみて、びっくりしましたが、小さいころからせきにんをもって、何かするようになっていっているのはとてもいいほうほうだと思います。
- ⑤ (略)ほんとうに私は書道もふつう字を書くことと同じと思っていました。でもそうではありません。書道を書くとき心はちかづいた気持ちを持ってきんちょうしないでゆっくりよくちゅういしてする動作だとわかりました。かんたんに言えば茶道と同じようなゆっくりしたどうさで心の安心な気持ちを持って書道を書くのは正しいとわかりました。はじめての字を書くとき何も考えなくても、何回もれんしゅうしたとき、書道のじみなうつくしさがわかりました。

4. 自己評価への反映

研修では、開始時に自己目標を立て、終了時に自己評価を行い、帰国後の目標を決定すると既に述べた。「研修活動の記録」が、自己評価や帰国後の目標にどう影響を与えているのか、以下で検証する。

前述のポートフォリオに入れられる自己目標、自己評価の書式は右の例のようなものである。「日本語」と「体験」について、「この研修でしたいこと」つまり自己目標を書き、その目標に対応する形で「できたこと」すなわち自己評価を書き入れる。そして、下の欄に帰国後の自己目標を新たに書く、というものである。

学習者Aの自己目標及び自己評価から、日本語に関する部分を抜き出すと図3のようになる。学習者Aは、研修開始時に、日本語に関して左段の四つの目標を立てている。中段には「研修活動の記録」中の目標と関連する記述、右段には最終的な自己評価を示した。

ここからは、学習者Aが研修中、自身の自己目標を意識しつつ、それに関する日本での生活や研修の中での気づきを「研修活動の記録」に記述し、またそれを振り返りながら、自己評価を行っていることが伺える。

さらに、「研修活動の記録」5週目、6週目に現れる、自身の専門と日本語との関わりについての記述は、「能力試験2級に合格し、日本の大学に留学する」という帰国後の目標設定につながっている。

自己目標と自己評価例

3. この研修での自己目標と自己評価

	この研修でしたいこと	できたこと
日本語	<ul style="list-style-type: none"> 日本の新聞を言葉めるようになりたのです。 日本の生活の大切な漢字と言葉を勉強したいです。 一人で日本人と話したいです。 自国のことをほかの人と話したいです。 	<ul style="list-style-type: none"> まだ全部の新聞の言葉は分かりませんが、新聞のきじを読む時、きじの基本内容がまあまあわかるようになりました。 日本にいた時間には日本の生活でよく使った漢字に注目して、後で時間があつたときにこの漢字を勉強しました。 一人で日本と話すことはできました。はじめきんちょうしていました。でもあとでよろこびました。 二回 自国のことについて発表しました。はじめに、米料理について、あとで私の町について話しました。
体験	<ul style="list-style-type: none"> 日本人と日本文化についてを話したいです。 日本の伝説や白ひな人形を体験して、習いたいです。 日本の有名なまつりを見たいです。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームステイの時に日本の家族と日本文化と、お話を話して話したいです。 大阪の方に会った時日本の文化を体験して、私はそれによく思いました。 日替りがまわりをのり、このごろ日本でまつりが少なくなりました。まつりを見ることはできませんでした。

国に帰ってから、何をしたいですか。
国に帰ってから、二年間毎日日本語を勉強したいです。
その後日本語能力試験の二級に合格して、日本の大学に留学したいと考えています。

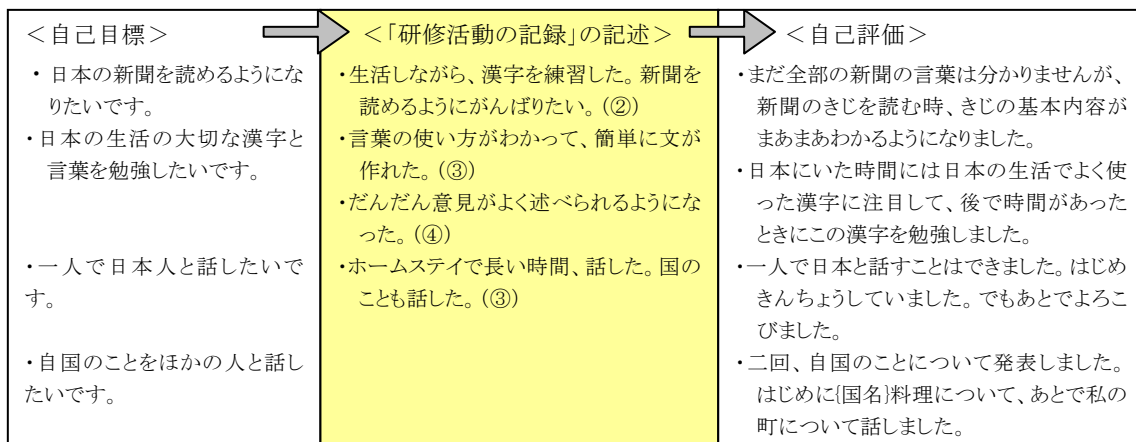


図3 自己目標、自己評価と、「研修活動の記録」の記述 学習者A

次に、学習者Bの「体験」部分の記述を図4に示し、検証したい。学習者Bの自己目標

は「日本の生活様式はどうか体験したい」と、幾分漠然としたものであるが、「研修活動の記録」の記述を通して具体的に新たな日本のイメージを作っていく、明らかにそれを反映させる形で自己評価を行っている。この学習者は、帰国後の新たな目標に「文法や漢字を習っていても、日本文化と生活様式についてもっと勉強したい」と書いている。文法や漢字が中心の学習で、教科書で習うだけの日本文化や社会しか知らなかったと言う学習者が、実体験をもとに文化や生活についての考察を深め、新たな視点を得、その興味が次の学習目標につながっていることがわかる。

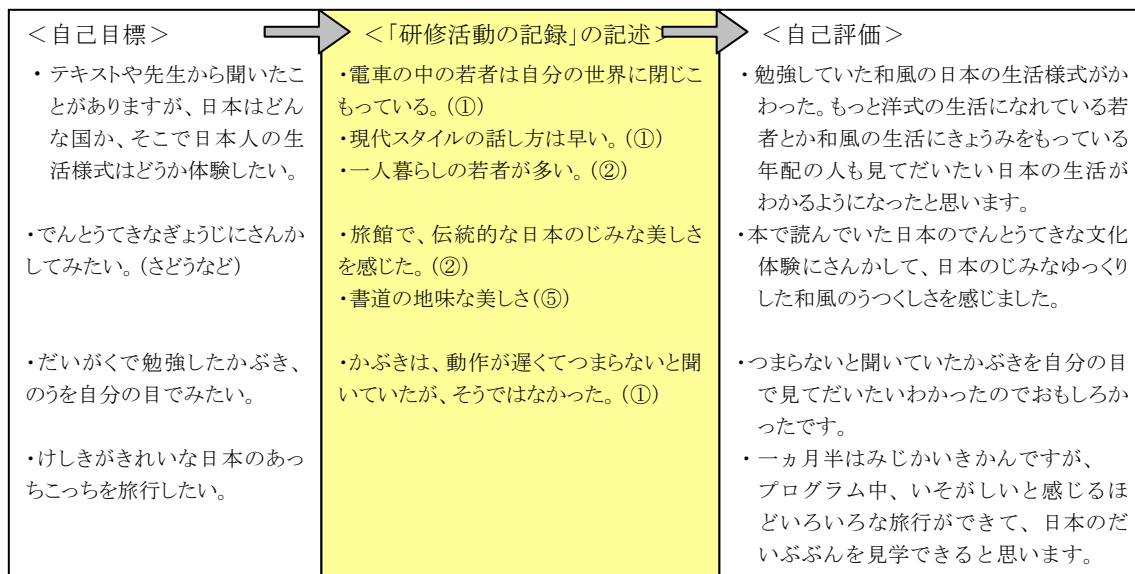


図4：自己目標、自己評価と、「研修活動の記録」の記述 学習者B

先に述べたように研修参加者には、教師主導に慣れている者が多く、以前はうまく自己目標を立てたり、自己評価を行ったりすることができない者が少なくなかった。例えば自己評価といっても「日本語が上手に話せるようになりました」「日本文化を実際に体験しました」といった評価しかできなかった。しかし、「研修活動の記録」を取り入れることによって、より具体的な自己評価が可能となった。自己評価の中には「研修活動の記録」に記述された内容が見られ、毎週の記録を通して学習者が内省活動に慣れ、また、それを振り返ることが最終的な自己評価へ繋がっていったといえるだろう。

5. 学習者による活動の評価

では、学習者自身は、この活動をどのように評価しているのだろうか。研修終了時に行った聞き取り調査で、学習者は「研修活動の記録」について以下のように語っている。

- ・このような経験は初めてだ。「気付いたこと、考えたことを書く」というのは始めは難しかったが、段々慣れた。日記ではなく、考えをまとめるいい練習だ。
- ・題を与えられたらもっと簡単に書けると思う。何について書くか考えるのは難しい。
- ・自分自身を分析して、振り返り、目標を立てることができる。
- ・自分の中の変化を見ることができる。前はこう書いたが、今はこうだ、のように。

今回の検証を通し、「研修活動の記録」の記述そのものから、学習者に自律学習を意識させることができたと証明することはできないかもしれない。しかし、学習者自身が、日記ではなく「気付いたことをまとめる」ことの難しさを指摘しつつも、それに次第に慣れていったこと、また、「自分自身を分析することができる」「変化を見ることができる」と述べていること自体に、繰り返しのなかで学習者が、内省し、自分で考えて行動する自律的な姿勢を身につけていったことが現れていると言えるのではないだろうか。学習者が自分自身の日本語学習や日本文化・社会への理解の目標を立て、振り返り、記録し、自己評価する中で自律的な学習者として少しずつ成長していったのは確かであり、「研修活動の記録」や評価など自律学習支援の一連の流れは、学習者の自律学習の意識化になんらかの役割を果たしたと言えるだろう。

6. ラウンドテーブルでの議論と考察

ラウンドテーブルでの発題後には、「挙げられた学習者 A の例では、日本語に関する内省が深まっている様子が現れていたが、そうではない学習者や途中でだれてしまう学習者はいるか?」「気づきを記録するということが、自律学習につながっているのか?」「書き方自体も慣れるに従い、変化していくのか?」「週フィードバックなどでクラスで内省を共有することの効果はどのような点にあるか」などの質問が出た。

実際には、内省がうまくできず、時系列に沿って自身の体験を綴る日記のような記述しかできない学習者もいたのは事実である。その場合は、教師がその記述の中から一部を取り出して聞き出しながら、コメントや口頭でのアドバイスをを行い、内省を促した。記録の書き方は、学習者が内省に慣れるに伴い、具体的な記述ができるようになったり、気づきを深めて自分の考えを示したりと少しずつ変化していった。一方、うまく内省できている学習者であっても、「初めは書くのに何時間もかかったが次第に慣れていった」と述べており、表面上の書き方が変化していなくても、学習者自身が自律的な学習者として成長していったことが窺えた。また、週フィードバックの時間は、それぞれの気づきを学習者同士で共有することにより、内省の視点を広げる、また相互に刺激となることで、記録を継続するモチベーションを維持する効果があったように見受けられた。さらに、自分が日本語で記述した記録を元に体験を話し合うため、レベル差をあまり気にせず他の学習者にまとまった話を伝える練習の機会ともなっていた。

このように、研修活動の記録はただ書かせればよいというものではなく、そこで内省を促し、引き出すためには、記録の書式や、指示の仕方、教師のサポートのあり方、また、書かれた記録をどう活用するか、といった全体的な工夫が必要である。しかし、それは一方で、コースの性質や学習者の特徴、人数などの違い、あるいは教師の振舞い方で容易にその結果が変わってしまうということでもある。学習者ひとりひとりにとって意味ある活動にするためにどう支援すればいいのか、という問題は解決されたわけではなく、依然課題として残っている。

一方、ラウンドテーブルでの今回の発題への評価としては、「このような記録を1回で終わらず、継続しているのがいい」、「最後に全部をまとめてポートフォリオにするというのは学習者にとってもまとめて振り返る機会になる」など、「研修活動の記録」という試みを継続的にスパイラルに行うことによる自律学習への姿勢づくりの効果、またこれら学習

者による記録や自己評価をコース全体の評価に取り込んでいることに対して評価する声が多かった。

ラウンドテーブル参加者の実践としては、コースの始めと終わりに自己目標、自己評価を行っているという例は聞かれたが、それが継続的なサイクルとなっている例は少ないようだった。トムソン木下(2008)は、学習者の自律性を高めるために、自己評価は一回限りではなく継続的に行うことが大切だと指摘しているが、今回の検証からも振り返りを継続的に繰り返し行うことが自律学習の意識化には効果的だということがわかった。また、古屋・古賀(2008)は「活動型」の学習では「振り返り」の活動を組み込むことにより、学習者が自らの変化・向上を認識することができる」と指摘しているが、今回の試みはその振り返りの活動をコース全体に組み入れる方法の一つを示したものとも言えるだろう。

一方、ラウンドテーブルの議論では、スピーチやプロジェクト活動など活動型の科目やコースの場合、自己評価がその後の動機づけの役割を果たすなど有効であるとの賛同があったが、これをコースの評価、つまり成績に組み込むことについては意見が分かれた。武他(2007)では教師による成績と学習者の評価を分離せず、学習者のプロダクトをポートフォリオとして提示することで「学習過程や伸びの程度」を読み取れると主張し、数値評価ではなく、自己評価を制度的評価としての成績とすることを提案しており、菅原・高橋(2008)でも学習者が「される評価」から「する評価」への転換の必要性を示唆しているが、実際にそれをコース評価に組み入れることは今後の課題であるとしている。今回の試みは活動型コースにおける数値評価以外の評価方法の提案ともなったのではないだろうか。

注

- (1)同研修のコースデザインや科目内容については熊野(2008)で詳しく紹介されている。
- (2)記述例1, 2, 自己目標, 自己評価は, 学習者の記述のまま, その他部分については, 筆者が要約した。

参考文献

- (1)熊野七絵(2008)「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』第18号, 31-46
- (2)菅原和夫・高橋澄子(2008)「学習者の自己評価を促すプロジェクト活動—フォローアップインタビューによる「される評価」から「する評価」への転換—」『2008年度日本語教育実践研究フォーラム予稿集』104-107
- (3)武一美・市嶋典子・キムヨンナム・中山由佳・古屋憲章(2007)「活動型日本語教育における評価のあり方について考える」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム』2007年度日本語教育実践研究フォーラム, 1-10
- (4)トムソン木下千尋(2008)「海外の日本語教育の現場における評価—自己評価の活用と学習者主導評価の提案—」『日本語教育』136号, 27-37
- (5)古屋憲章・古賀和恵(2008)「学習者は自らの変化・向上をいかにして捉えたのか—活動型日本語クラスにおける「振り返り」の意義を問う—」『2008年度日本語教育実践研究フォーラム予稿集』145-148